

令和２年度第２回北海道地方競馬運営委員会議事録

〔 日時 令和２年 10 月 30 日（金） 13:30~15:30 〕
〔 場所 TKP 札幌赤レンガ前 5F すずらん 〕

1 開会

（競馬事業室 下堀参事）

2 あいさつ

（農政部 小田原農政部長）

- ・ 令和２年度第２回北海道地方競馬運営委員会の開催に当たり、一言ごあいさつ。
- ・ 本日は皆さまご多忙の中、この検討会へ御出席いただき感謝申し上げますとともに、日頃から道政の推進はもとより、競馬事業の運営に御理解と御協力をいただいていることに御礼申し上げます。
- ・ さて、今年度のホッカイドウ競馬の発売状況は、後ほど詳しく説明するが、昨日までの 79 日間の開催で、発売額は対前年比 150.9% の 487 億千万円となった。閉幕まであと 3 日間を残しているが、既に過去最高の発売額である平成 3 年度の 454 億円を更新。
- ・ 4 月 15 日の開幕以来、無観客で競馬を開催していたが、残り 3 日間は人数を制限して、今年度初めて観客を迎えて実施する。
- ・ このうち、11 月 3 日にはダート競馬の祭典と言われている JBC 競走を実施する。後ほど、議題の中でも紹介させていただくが、今年で 20 年目を迎える地方競馬の全国的なイベントであり、盛り上げていきたいと考えている。
- ・ 今年は新型コロナウイルスの影響で、場外発売所の休止や無観客による競馬開催で大きな影響を受けるものと考えられたが、過去最高の発売を記録できた。
- ・ これは、きゅう舎関係者の努力はもちろんであるが、馬産地や本日お集まりの委員の皆様御理解と御協力があったからこそ結果だと考えており、この場を借りて改めて感謝申し上げます。
- ・ 本日は「第 3 期北海道競馬推進プラン」の「素案」について、内容を御検討いただく。
- ・ 素案は、これまでの経過や現状と課題を整理した上で、今後の取組を示す内容となっている。本日は、委員の皆さまそれぞれのお立場での、忌憚のない御意見や御提言をお願いし、開会のあいさつとする。

3 議題

委員の紹介

（平本委員長）

- ・ 議事に入る前に、今年度委員になられた方で、本日初めて会議に参加される委員いるので紹介。本委員会の副委員長の串田様。

(串田副委員長)

- ・ このたび委員に就任した串田です。副委員長ということで、大変な重責と考えている。競馬や委員会の状況をまだまだ把握し切れていないが、皆さまのご協力をいただきながら努めたいので、よろしくお願いします。

(1) ホッカイドウ競馬の発売状況について

- 競馬事業室 太田主幹より資料1「ホッカイドウ競馬の発売状況について」を説明。

(西村委員)

- ・ J R Aの場外発売は、本来はどのくらいあるのか。

(事務局 佃室長)

- ・ 直近の発売売で、なんとか半分程度の状況。入場者は7～8割くらいまで戻ってきた。今は全レース発売しているが、少し前まで4レースしか発売しておらず、土曜日で2割程度、日曜日でも3割程度の発売。
- ・ 通常、9レース以降のみで全体発売額の7割程度を占める中、コロナ対策として14:00までの発売で客が回転しないため、通常の半分程度の発売額になっている。

(2) 第3期北海道競馬推進プラン（素案）の概要について

- 競馬事業室 太田主幹より資料2「第3期北海道競馬推進プラン（素案）」を説明。

(鳴海委員)

- ・ プラン策定にあたって、「競馬事業で生じた収益は老朽化が進む施設、設備の計画的な整備や出走馬を確保した魅力ある番組編成による売り上げの維持・拡大への取組などホッカイドウ競馬の持続的な発展に繋がる対策に活用するよう」という要望を日高町村会、日高総合開発期成会、軽種馬生産構造改革推進会議、日高軽種馬振興対策推進協議会の4団体が連名で、道農政部はじめ関係機関に要望することになっているので、よろしくお願いします。

(平本委員長)

- ・ 今回の素案にも施設の整備・更新については大きな部分を割いている。黒字経営のうちに、きちんとやっておくことが次のステップに繋がるので、重要な課題だろうと、私自身も認識。

(西村委員)

- ・ 関連で、J R Aの場合、収益金の使い道は1／4は福祉で3／4は畜産振興など法律で決まっている。農業高校への出前講座の際に生徒に、平成の30年間でJ R Aが国庫に納めた金額はおよそ10兆6千億円。そのうちの3／4は畜産振興に使われている

と教えた。

ホッカイドウ競馬の場合は、一般会計への繰り入れについて何か決まりはあるのか。

(事務局 下堀参事)

- ・ 法的にはＪＲＡと同様の扱いであるが、一般会計からの借金が２３０億円あり、ホッカイドウ競馬で収益があったとしても、その借入金を返しながら、将来のために基金を積んでいく必要。

(事務局 佃室長)

- ・ 道民から見たら、借入金があるのに先に施設整備をするように見えることから、まずは借金を返してから実施すべきではとの意見もあるかと思う。このため、財政部局とも協議して借入金を返済しながら一部は基金を積み立ててもらい、必要な対策を実施する形。

(西村委員)

- ・ 道民に認知してもらうためにも、利益の一部を一般会計へ入れることで、競馬以外のことに利用されていることを堂々と道民に主張し、知ってもらうことも必要。競馬は単なる博打ではなく、収益が社会貢献に使われていることはファンの人も含め、あまり知られていない。

(平本委員長)

- ・ 大変重要なご指摘。ホッカイドウ競馬が果たしている役割と密接に関わる場所。黒字が出ているときに、借入金の返済も重要だが、なぜ北海道が競馬をやっているのか、きちんと正当性があるって競馬事業を実施していることを、胸を張ってアピールしても良いと考える。

(石川委員)

- ・ これまで競馬に触れたことの無い人を、どうやって競馬場に呼び込むかという観点から意見したい。認知度向上に向けた取組としてさっぽろ雪まつりやサッポロファクトリーでのPRとあるが、これ以外ではどんなところで実施した事例があるのか？

(事務局 佃室長)

- ・ 赤レンガ前の農業イベントなどでも競馬のブースを出展してPRを実施。

(石川委員)

- ・ 競馬場に足を運んでくれないというのは、まだまだ競馬や競馬場を知らない人がいるのではないかと考える。例えばオータムフェストやライラックまつりなど、もう少し人の集まるところに宣伝しに出て行くのが良い。ホッカイドウ競馬を知ってもらうため

そのイベントに、とねっこジンギスカンを提供して、そこで競馬中継を映すと良いのでは。

もう一つ、来場者プレゼントとして、近隣自治体の特産品を送るのも良い。地元の特産品を貰うのは自分としてもうれしい。

(事務局 佃室長)

- ・ 道外の人々が来場した際に先着ではあるが、昆布のプレゼントを実施したことがある。これはかなり好評だった。やはり道外客には昆布は人気。

(西村委員)

- ・ 生産者団体で盛岡だったと思うが三石昆布を競馬場で500人にプレゼントしたことがあるが、好評だった。北海道の昆布は人気。

WINS や J-PLACE においても生産地からのプレゼントを提供しているが、札幌など人の多い場外でもっと実施するべきではある。

(石川委員)

- ・ ホッカイドウ競馬の弱みとして、冬の間は競馬ができないということだが、その間、競馬場はどういう状態になっているのか。

(事務局 佃室長)

- ・ 2歳馬の調教を行うなど、トレーニングセンターのようにになっている。

(石川委員)

- ・ 冬に使わない場所を、それを逆手にとってスノーパークのように使って人を集めている事例が札幌近郊で増えている。数日でも良いので、雪の中で馬と触れあえるイベントとして、馬そりとか雪上乗馬などを実施してはどうか。あるスノーパークでは、雪の上で馬に乗り、100m 程度をただ行って帰ってくるだけなのに順番待ちが出るほどの人気。競馬場にいる馬は競走馬なので、素人が乗れる馬をどこから調達してくる必要があるが、レースの無い冬場の競馬場の活用に対する意見。

(事務局 佃室長)

- ・ 札幌競馬場は冬に馬そりを実施。私が先輩から言われていたのは、競馬場に来たら馬と触れあえる場所が必要ということ。門別競馬場にもそういう場所を作りたいがスペースが無く、今後、きゅう舎整備を通じて検討していきたい。

(石川委員)

- ・ 冬の競馬場で、賞金を出して人を走らせても良いと思う。夏にはやれないことを冬に実施するという趣旨。

(平本委員長)

- ・ 面白そうな提案。是非ご検討願う。

(かとう委員)

- ・ 人の充実の観点から、意見を二つ。
- ・ きゅう務員の住居を初めて視察したときの印象として、住んでいて臭いはどうなのかとか、家族はどう思っているのかなどを感じた。一般の人が見ても同様に感じるだろう。収益があるときに、その 7 割はきゅう務員などのヒトのために使って欲しいくらい。今の住居の見た目のイメージでは、騎手やきゅう務員にあこがれて若い人がこないと考える。一番大事なことが「人」。
- ・ もう一点は、顧客。来場者の男女比は実際に自分が競馬場で見た印象と、調査結果とは一致している。では、それをどうするのか、という部分がプランの中では少し足りないと思う。例えば、男女比が 7 : 3 を 5 年で 6 : 4 にするという目標を立て、計画に書くべき。仮にそれを実現できなかったとしても、それについては誰も怒らない。

若い人に来て欲しければ、若い人が広報計画を立案すべき。道庁の水産林務部でも若手を取り組もうとなり、私もその講師を務めた。結果、「どさんぎょ」という一週間に一度発信する Facebook を立ち上げた。今は全道の職員が 2 ~ 3 日毎に記事をアップしている。発信したい相手に近い層が発信する方が望ましい。見る人もその方がわかりやすい。

(平本委員長)

- ・ とても重要なお指摘。私も、ターゲットと同じ年齢層にプランを作ってもらうのが一番効果的だと言ってきた。
- ・ 一昨日、学生と話をしていて、全学教育科目（かつての一般教養課程）で「競馬の世界」という科目があると聞いて驚いた。獣医学部の講座であるが、実際には JRA の職員が来て講義を実施している。内容は競馬の歴史、番組、競走馬の学術的研究、競技場としての競馬場、馬の解剖学、競走馬の生産、データの活用、競馬場見学など。まさに若い人に向けた JRA の取組。理系の一般科目として開設。文系側でも「社会の認識」という大きなくくりの中で、例えば「北海道経済と地方競馬」といったテーマなどをやるなら、私も一肌脱ぎます。先ほどの学生に聞くと、大学で一番面白かった講義が、競馬の世界だったと聞いている。若者が興味を持つ入り口としてこういう形態もあると考える。
- ・ 西村委員の出前授業のように道立高校向けの講座など、北海道が競馬を経営していることの積極的な意味合いも PR する機会になる。

(串田副委員長)

- ・ 競馬の見識は無いが、各委員の意見はごもっとも。コロナ禍で馬券の買い方もネット

にシフトしたが、コロナ後もいつまでもこの状況が続くとは考えられない。北海道は観光地として魅力的である中、借入金のあるホッカイドウ競馬が新たな投資をしづらいことはわかるが、体力ある今のうちにしっかり投資をすべき。10年後にやるのでは間に合わない。その間に担い手が育成できないし、途切れたらお終いになる。どのように取り組んでいくかが大事で、皆さんで議論したことをどう形にしていくかを考えるべき。スピード感を持って次の目標に進むべきと考える。

(事務局 下堀参事)

- ・ きゅう舎に関するご意見はごもっとも。住環境の悪化はきゅう務員等が定着しない原因の一つだと捉えている。馬が馬房を蹴る音が響いて寝られないとか、臭いの問題などの課題がある。JRA では人と馬の分離を進める方向で、今回のきゅう舎整備でもその観点で検討したい。また、家族の方は競馬場内ではなく街の中に住みたい意見もあるので、街から競馬場に通う方向性もありえる。

(浜近委員)

- ・ JBC2 歳優駿は他場からの遠征を楽しみにしていたが、頭数が少ない。やはり、他場からの遠征は難しいのか。

(事務局 佃室長)

- ・ 2 歳は他場から来ても勝てないということも要因。しかし、全国から強い馬が集まって活躍してくれないと、レースレーティングも上げられないので、来年度以降は集ってもらう取組を検討したい。

(浜近委員)

- ・ SPAT4 の JBC キャンペーンも、Road to と言いながらホッカイドウ競馬のレースしか対象になっていないなど、その辺も南関と考えてほしい。

(事務局 佃室長)

- ・ 今後は顧客から、より注目されるような番組にしなければならないと考えている。どのレースで勝てば、次にどのレースに出走できるのかわかりやすくしないと、注目してくれなくなる。また、地方競馬はシリーズ競走を多数実施しているが、そのレースの次の展開が無いという課題がある。中央競馬のトライアルレースのように、そのレースに勝てば G1 に出走できる仕組みにすると、皆が注目するレースになる。地方と中央が連携して、注目される交流競走を展開していかなければならない。今は売れているが、注目されないとそのうち売れなくなる。それから情報発信も誰を対象にしているのか、きちんと考えて発信していく必要がある。

(浜近委員)

- ・ その意味では、この委員会自体も 20 代のメンバーがいた方が良いのかも知れない。

(西村委員)

- ・ JRA はステップアップレースがあってわかりやすく、それが発売に繋がっている。ホッカイドウ競馬でも 2 歳のレースでステップを踏めるレースがあるが、宣伝の仕方が悪いのか、あまり認知されていない。
- ・ もう一つ、かとう委員の意見を聞いて重要だと思ったのが、日高地域活性化支援室と JRA との協議で、若い人の就労募集では、例えば 2 年間働いてみませんかという募集の仕方よりも、一度経験してみませんかというところから入らないと、中々集まらない。

競馬界でも馬文化に注力しており、乗馬やセラピー、観光牧場などを入り口としている。そこで一生働くというがんじがらめの入り口では誰も来ない。入りやすくして、迎える方も余裕を持つことが大事。そうして馬に接する土壌を作っていく。

競馬場も同じで、JRA はそのことに気づき始め、それを推し進めている。馬産地なのに馬に触ったことも無い小学生がいる中、静内町では「うまキッズ」という取組があり、小学校の校庭に馬を連れて行くなど、小学生の馬文化への理解向上の取組を進めている。

- ・ 私が出前講座で農業高校生にする話の中では、馬産地なのに馬が歩いている横を、町民の車がスピードを出して通り過ぎていくことを話す。これは町民が馬の性質を何も知らないということ。馬文化が根付いていないと言える。農業高校の生徒が地元に残らなくても、馬学を学習した馬の理解者が全国に広がると、馬文化の醸成に繋がると考える。競馬場には馬に触る場面は、たくさん作った方が良い。

(平本委員長)

- ・ 今の発言から、道が競馬を運営している意義をきちんと中心に据えることの重要性がわかる。

(3) JBC 2 歳優駿競走について

- 競馬事業室 太田主幹より資料 3「JBC 2 歳優駿競走について」を説明。

(鳴海委員)

- ・ 知事は今回初めて競馬場に来るかと思うが、北海道が運営しているのだから、開幕など年に一度は来場していただきたい。スケジュール調整は大変かと思うが、要望して欲しい。

(平本委員長)

- ・ 若い鈴木知事は全国でも知名度のある方。一回でも来場し報道されると、ホッカイドウ競馬にプラスになるので、是非ご検討願いたい。

(浜近委員)

- ・ コロナ禍の中、今年度は誰も想像できなかった売り上げになったと思うが、理由の分析はあるか。

(事務局 佃室長)

- ・ 在宅勤務等でネットが大幅に伸びた。公営ギャンブルの中ではネットで一番買いやすい仕組みができていたのではないか。競輪などはかなり落ち込んでいた。

(浜近委員)

- ・ 今までネットで馬券を購入していなかった人も参加してきたということか。

(事務局 佃室長)

- ・ ネット業者に、その辺の分析もお願いしている。

(平本委員長)

- ・ コロナが落ち着くと、競馬の発売は逆に減速してしまうかも知れない。売れている今のうちに分析し、次の手を予め打つべき。

(事務局 佃室長)

- ・ 最近では、Go to 政策などで他にお金の使い先ができたため、発売の勢いも少し鈍ってきている。生活が戻ってくれば、ネットでの発売もそれほど期待できなくなってくると考えており、それを見据えて来年度の対策を検討していきたい。

(鳴海委員)

- ・ これからの映像は5 G通信や8 Kでの動画撮影などを活用して、馬の素晴らしさを伝えるなど、他の主催者に負けないホッカイドウ競馬ならではの取組をしていただきたい。

(串田委員)

- ・ 担い手関係について、西村委員からもガチガチの条件（完全な就職）で募集しても集まらないとの話があった。JA グループでも自ら農業を発信・アピールするアグリアクションを展開。その他、人材募集でパラレルノーカという取組もあり、新規就農というハードルの高い募集ではなく、「農業【を】しませんか」から「農業【も】してみませんか」にシフトするもので、農業体験や短期間の農業就業する取組のような部分でもJA グループと競馬が一緒に協力して行ければと思っている。

(平本委員長)

- ・ ホッカイドウ競馬の「強み」「弱み」について、経営学から見ると、その他に機会と脅威も考えることが大切。強み strength、弱み weaknesses、機会 opportunity、脅威 threats の S W O T。ホッカイドウ競馬の強みと 5 G などの技術背景がある中でどんな見せ方ができるかとか、逆に強みはあるけどコロナ禍の脅威があるといった場合、それを逆手にとってどのような一手を出すかを検討するなど、S W O T 分析をよく使う。折角強みと弱みを分析するのであれば、機会と脅威も分析して次の検討のきっかけにすることもあって良いのではと考える。弱みについては、冬に開催できないだけではなく、もう少し分析して、その他にも弱みを見つければ、それを逆手に取る対応策も見えてくるかもしれない。

人の充実は次のプランの肝になる部分と考える。就業への入り口の問題や、既に働いている人の環境改善など、遅まきながらも取り組んでいるというアピールは重要で、それはプランにしっかり書かれており、これは良い点だと感じている。

【まとめ】

- ・ 大きく 3 つの点について議論いただいた。
 - 1 つ目の発売状況については、売り上げの伸びを今分析しておくことが、コロナバブル後の急減速を少しでも小さくするために役に立つのではという視点をご検討いただいた。
 - 2 つ目のプランについては、多くの建設的意見が出された。老朽化した施設の問題や人の問題、新たなファンの獲得、そのための様々な取組の可能性が提案されたが、実現可能な部分をすくい上げていただきたい。
 - 3 つ目の J B C については、次年度以降もこのイベントが発展して続いていくことを祈念する。

(事務局 佃室長)

- ・ 貴重なご意見に感謝。いただいたご意見をもとに、プランを作り上げてまいりたい。また、来年以降も発売確保に取り組んでまいりますので、今後ともよろしくお願いする。

(以上)